

# 化学品・製品安全

## 化学品管理

2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議 (WSSD)」において合意された「2020年目標」\*1の実現のために、2006年の「国際化学物質管理会議 (ICCM)」において、科学的なリスク評価に基づくリスク削減、情報の収集と提供などを進める「国際的な化学物質管理に関する戦略的アプローチ (SAICM)」が採択されました。当社は、SAICM国内実施計画に沿って、化学製品の全ライフサイクルにおける人の健康や環境への悪影響の最小化に取り組んでいます。

\*1「2020年までに化学品の製造と使用による人の健康や環境への悪影響の最小化を目指す」



## 製品ライフサイクルにおけるリスク評価

化学製品の研究開発、製造、販売、変更等に至る各段階で、リスク評価(事前評価)を実施しています。バリューチェーンにおける人、環境へのリスク評価は、生物科学研究所が自社または外注で取得したデータ、文献等の外部データベースの安全性試験データの他、物理化学的性質、作業環境条件等を基礎としています。リスク評価結果に基づき、懸念化学物質の回避や、より安全な化学物質への代替を検討しています。また、これらのリスク評価結果は、トップマネジメントに報告され、社内の全関係者に周知されるとともに、技術移転書またはSDS(安全データシート)等によってバリューチェーン内に伝達されます。

また、ICCAおよび日本化学工業協会(JCIA)が推進するGPS/JIPS活動の一環として、当社の化学製品を対象にリスク評価を行い、リスクに基づいた適正な管理とともに、その安全性情報をGPS安全性要約書にまとめ、公開しています。さらに、日本化学工業協会が推進する「化学物質が人の健康や環境に及ぼす影響に関する研究を長期的に支援する国際的な取り組み」であるLRIにも参画し、人の健康や環境へのリスク評価に関する研究の進展に向けた活動をしています。

主なリスク評価項目	
1 法令・法規・協定遵守	6 物流時の安全、安定性
2 化学物質の安全性： ヒト、環境に与える影響	7 廃棄物減量化
3 作業者の労働安全衛生	8 品質保証
4 設備および操作の安全	9 委託・購買・販売面での環境・安全
5 製品の安全性、環境負荷	

リスク評価(事前評価)実績(件数)

段階	評価責任部署	2014	2015	2016
研究開発	研究所	31	18	19
工業化試験	工場(技術)	2	12	19
製造	工場(製造)	96	116	110
合計		129	146	148



## 動物実験に対する配慮

社会に有用な農薬、医薬品、医療材料そして化学素材の開発研究には、実験動物を用いた評価が必要不可欠です。生物科学研究所では、動物実験に対して、動物福祉の基本理念である3Rの原則(Replacement(代替法の活用)、Reduction(使用数の削減)、Refinement(苦痛の軽減))と「動物愛護及び管理に関する法律」等の法令に則り、「日産化学工業株式会社 生物科学研究所 動物実験に関する指針」を制定しています。これに基づき、動物実験委員会で実施の可否について倫理的かつ科学的に審査を行い、その運用を自己点検することにより、動物福祉に配慮した適正な動物実験に努めています。

これらの取り組みは、公益財団法人ヒューマンサイエンス振興財団により、動物実験施設として第三者認証を取得しました。

### TOPICS

#### 動物実験施設 第三者認証

生物科学研究所では、動物福祉に配慮した具体的な取り組みとして、複数名の審査員による事前調査や実験動物へ与える苦痛の程度を考慮した実施の可否判断および試験中の動物への人道的エンドポイントを考慮した苦痛軽減措置を行っています。また、自己点検を実施し、動物実験の倫理性確保と科学的知見の信頼性向上に努めています。これらの取り組みにより、2016年12月に、動物実験の自主管理体制の第三者検証を実施している公益財団法人ヒューマンサイエンス振興財団より、厚生労働省の指針に基づいて動物実験を適正に実施しているとの認証を取得しました。



#### 新規皮膚感作性代替法の導入

近年動物愛護への関心が高まり、実験動物を用いない代替試験法の開発が積極的に進められています。皮膚感作性試験の新規代替法であるADRA法(Amino acid Derivative Reactivity Assay)は富士フィルム株式会社が開発した試験法であり、日本化学工業協会LRIの支援を受け、OECDテストガイドライン化に向けてバリデーション試験を実施中です。当社はこの試験に参画し、研究支援を行うとともに他社に先駆けて生物科学研究所安全性研究部への本試験法の技術導入を完了しました。

